宇宙開発基地 九州を訪ねて

道航空宇宙産業基地研究会議の視察から

—☆上☆—

有人化時代に対応した次世代の宇宙基地誘致を目指す北海道。その構想実現に向けた方策を探る北海道航空宇宙産業基地研究会議は八月二十二日から二十五日までの日程で、九州の二カ所を視察した。一行は基地候補地に挙がっている大樹町の福原勉町長をはじめ、産・学・官からの十五人。昨年改定された宇宙開発政策大綱では有人活動への方向がつけられたばかり。実現にはまだ長い道のりがかかると予想される中、誘致に向けて何をすべきなのか—。さまざまな課題を抱えて視察団は日本を代表する宇宙開発基地・九州を訪れた。

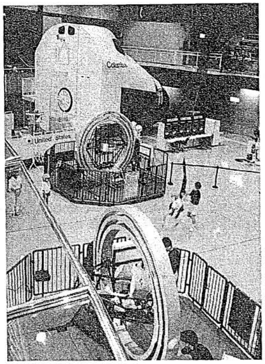
（野勢　英樹記者）

北九州市小倉の住宅街を抜け、山を一つ隔てると、臨海工業地帯が視界に広がる。白と赤で塗り分けられた煙突、大きな工場が林立する中にスペースシャトルがひときわ目をひく。今年四月オープンしたスペースワールド。帯広のグリュック王国がドイツに焦点を当てているように、従来の遊園地スタイルから脱皮して、明確なテーマに基づいて事業展開を図るテーマパークは全国各地で相次いでオープンしているが、このスペースワールドは「世界初の宇宙テーマパーク」がうたい文句だ。

北九州市は八幡、小倉、戸畑、門司、若松の五市が昭和三十八年に合併してできた九州初めての百万都市。筑豊炭田から産出される石炭と豊富な水、それに港湾と工業立地に恵まれた。中でも八幡は明治三十四年に官営の製鉄所が操業を開始して以来、鉄の町として発展を遂げてきた。しかし、鉄鋼不況の波が押し寄せ、九州ナンバーワンの都市はその地位を福岡に奪われた。

行政が全面的に支援

この不況の町に生まれたスペースワールド。誕生のきっかけは鉄の町の中核である新日本製鉄と青少年に宇宙への興味、関心を深める教育機関である米アラバマ州米国スペースキャンプ財団が昭和六十二年にライセンス契約したことだった。このスペースキャンプを核にしたテーマパーク構想が浮上。新日鉄で立地の場所を検討したところ、この北九州市が選ばれた。日帰り交通圏に千六百万人の人口があること、近隣に大型レジャー施設がなかったこと、また、九州は国内を代表する宇宙基地を有する背景に加え、「行政の全面的なバックアップがあった」と菅和彦総務課長。候補の一つだった大阪府堺市では行政の支援は得られなかった。事実、新日鉄グループを中心に設立した第三セクターには九州電力、西日本鉄道などの地場有力企業に加え、福岡県、北九州市が株主として入っている。スペースワールドは鉄の町地域活性の切り札として期待されているわけだ。


NASAの宇宙飛行士訓練と同様の体験ができるスペースキャンプ

スペースワールド

〝世界初の宇宙テーマパーク〟

学び遊んで疑似体験

殺伐とした雰囲気の工業地帯の中に立地した施設は異様な感じを受ける。しかし、中に入るとそこは宇宙へと夢を開く別天地。訪れた日は夏休みの終わり近くとあって多くの子供たちが午前九時の開門前から列をなしていた。

宿泊施設や大型遊具

八幡製鉄所に隣接する三十三万平方㍍の遊休地に三百億円をつぎ込んだ施設は大型パビリオンをはじめ、宿泊施設を併設したスペースキャンプ、大型遊具などが並ぶ。事業のコンセプトは「エデュテイメント」。教育（エデュケイション）と娯楽（エンターテイメント）とを組み合わせた造語で、「学びながら遊ぶ」といった方が分かりやすい。このコンセプトに従って造られた各種パビリオンでは、まるで宇宙空間の中にいるかのような疑似体験ができるよう工夫されている。地球と宇宙を結ぶ定期便、スペースシップに乗って宇宙都市「スペースシティー」に行き、さらにそこから宇宙船に乗り、月へ惑星へブラックホールへと向かい、帰りはワープして出口へ、という具合。実態はジェットコースターなどの乗り物を宇宙空間を走っているように演出しているわけだ。

こうした娯楽性が強い施設の一方、ライセンス契約で造られたスペースキャンプは教育色が強い。NASAで使われたのと同タイプの機器を使い、無重力状態で歩いたり、三六〇度あらゆる方向の回転を体験できるほか、シミュレーションを用いて、スペースシャトルの打ち上げ、帰還を再現する。ここでの参加者は宇宙飛行士や地上局のクルーになった雰囲気を味わえる。併設した宿泊施設に泊まり込みながら学ぶカリキュラムは一泊二日と三泊四日の二通りが用意されている。

既に入場者90万人

オープン以来、九十万人の入場者があり、「予定どおりの数。客層は正しくはつかんでいないが考えていたより年配の方が多いようだ」と菅課長。世界初の宇宙テーマパークは順調な滑り出しのようだ。

宇宙基地候補地、大樹町の依頼で財団法人エンジニアリング振興協会が今年六月にまとめた開発振興計画では「アストロシティ構想」を打ち出した。宇宙基地を前提にした観光開発で、この中の「コスモパーク」では基本のコンセプトがスペースワールドとよく似ている。施設をつぶさに見て回った福原勉大樹町長は「考えていた以上の施設」と驚いていた。

現在、大樹町には宇宙基地に適した広大な土地が広がるだけで、関連施設は何もない。「アストロシティは現在、マスタープランの前提となる企画書作りが進んでいる。いずれにせよ作ることも運営することも大変。当面はできることから着手していかなければ」と福原町長。宇宙基地それ自体とは直接関係のない施設とはいえ、誘致に向けた足掛かり。宇宙少年団の活動が広がりをみせるように大樹町の熱心な取り組みがアピールされる機会となるはずだ。先が見えない現在の状況では声をあげ続け、その熱意をどこまで持続できるか、そしていかに理解者を増やすかが誘致促進のカギを握っているようだ。

（つづく）